

書 評

黒田弘子・長野ひろ子編

『エスニシティ・ジェンダーからみる日本の歴史』

豊 福 裕 子

新しい世紀を迎え、さまざまな学問領域において「知」のパラダイム転換が急ピッチでなされている。同様に、歴史学においても従来の体系や枠組みにとらわれない、新たな視点の導入が求められている。例えば、これまでの歴史学では周縁に位置づけられてきた「エスニシティ」（民族）あるいは「ジェンダー」（性差）の視点、そして看過されてきた概念ともいえる「セクシュアリティ」。本書は、これらの概念をメイン・テーマに据え、日本歴史像の再構築を試みた論文集である。

「Ⅰ エスニシティ・国家・オリエンタリズム」、「Ⅱ ジェンダー・主体・言説」、「Ⅲ セクシュアリティ・身体・心性」という3章構成の本書には、計15編の論考が収録されている。「限定された時空」（p. iii）と編者たちがことわっているように、本書は日本通史として編纂されているわけではない。すべての章に共通することだが、収録されている各論考の取り扱う時間軸は、概ね中世から近世後期、近代最初頭に限られている。また、論及される地域、領域もさまざまであり、一様ではない。まさに「メンバーの軸足や重心は多様」（p. v）であるといえよう。

編者である黒田弘子・長野ひろ子の両氏は、冒頭の「刊行にあたって」において、民族紛争を背景に登場したエスニシティ、女性が主体性を確立する歩みのなかで思想的営為として登場したジェンダー、そして不可視化されてきたセクシュアリティの領域を取り上げ、新たな歴史像を創造することを本書刊行の

目的と位置づけた。そして、限定的な時空および領域での試みであることをことわりつつ、これらの概念が「いかにして歴史的・社会的に構築され、相互関連し、さらに変容を遂げていくのか」を考察し、「新たな「知」の創造にも寄与」(p. v) したいと結んでいる。

まず、本稿では編者たちが設定したメイン・テーマのうち「ジェンダー」を重点的に取り上げ、歴史像の再構築におけるジェンダー・アプローチの有効性、可能性を検証してみたい。その理由は、第一に第Ⅱ章の収録数が最も多い(7編)こと、第二は編者のひとりである長野氏の論考が収録されていることにある。長野氏は、本書ならびに、同氏が桜井由幾・菅野則子両氏と共同で編集した『ジェンダーで読み解く江戸時代』(三省堂、2001年)、『アエラムック—ジェンダーがわかる。』(朝日新聞社、2002年)に寄せられた論考他の著作から明らかのように、ジェンダー・アプローチを駆使して、日本近世史像の再構築を論理的かつ精力的に試みている研究者のひとりである。

一般的に「文化的・社会的性差」、「文化社会的につくられた性別」と解されているジェンダーの概念であるが、もともとは文法上の性の区別をあらわす用語である。文法上の性差を考えてみれば、それが恣意的に振り分けられたものであることは一目瞭然であろう。そこから、男女の性差を文化的、社会的に構築されたものとして理解する際の用語としても、ジェンダーが使用されるようになったのである。さらに、アメリカの歴史学者であるJ. W. スコットは、本来は「意味」をもたない男女の肉体的差異に「意味」が付与されているのだと表現し、ジェンダーを「肉体的差異に意味を付与する知」(『ジェンダーと歴史学』、1988年、邦訳1992年)と定義した。本書におけるジェンダー概念とは、まさにこのスコットの定義によるものである。

以下、本書および先に挙げた長野氏の著作から、同氏の提唱するジェンダー・アプローチによる歴史分析の手法を紹介し、女性史のそれと比較してみる。

長野氏はジェンダー史と女性史を異なるものとして明確に区別している。女

性史は一般の女性の生活や経験を研究の対象とするものであり、それぞれの時代や社会において、女性であること、あるいは女性として生きることの意味にまで踏み込むものではない。したがって女性史の領域が、常にジェンダーとオーバーラップするとは限らない。一方、ジェンダー史は「男女」をセット（ペア）にして捉えるものであり、その主要な課題のひとつは「男女の社会的関係の構造的把握」（p. iv）にある。

ジェンダー・アプローチのメリットの第一点として、長野氏は、女性史にとって女性が排除される歴史的側面を研究することは容易ではないが、ジェンダーは「歴史のあらゆる場に「侵入」することができ」（『ジェンダーで読み解く江戸時代』、p. v）るがゆえに、いかなる歴史事象をも扱うことが可能であることを挙げている。例えば、A時代のB地域のC事象には、女性がまったく排除されていたと仮定しよう。その場合、女性史の手法では経験として現れてこない事象を叙述することはむずかしい。一方、ジェンダー史では、ジェンダーの視点を持ちこむことにより、なぜ女性が排除されていたのかという社会的構造を解明できるのである。

第二点は、従来の歴史学の図式——男性＝普遍、女性＝周縁（特殊）——を否定できる、としたことである。1980年代からの日本女性史は、これまで研究者に顧みられることなく、歴史のひだの間に埋もれていた一般女性の姿——とりわけ女性の身体、出産、育児をめぐる状況——に光をあてることに多大な貢献をもたらした。それでも、そのことで女性史や女性研究に与えられた場所は、歴史や歴史学の周縁部分にすぎなかったと長野氏は述懐する。女性史がいわゆる「一般史」の補完としての役割しか与えられないのに対し、ジェンダーをキー概念に据えることで、一方の性の経験や行動様式を「一般史」としてきた歴史叙述に対して逆に基軸的な分析概念としての処遇をせまることができると主張したのである。なぜなら、ジェンダーは一方の性のみで成立する概念ではないからである。

第三点は、なお根強く残る本質論的な歴史認識を批判するのに有効なことで

ある。長野氏が例として挙げるのは、女性性の本来的属性と解釈されがちな女性の「聖性」である。同氏は女性の「聖性」を、ある特定の時空において女性性に付与された特徴と捉え、歴史的につくられたものであることを指摘し、ジェンダーの可変性という認識にもとづけば、従来の本質主義的な歴史認識を排除できるとした。

それでは、ジェンダー・アプローチによる歴史分析の手法は、本書第Ⅱ章所収の論考においてどのように適用されているのだろうか。

第Ⅱ章には、「日本中世における女の夢・男の夢」(酒井紀美) [以下、Ⅱ-1]、「衣料生産とジェンダー—中世後期公家の場合—」(後藤みち子) [以下、Ⅱ-2]、「戦争と女性—中世後期大和の場合—」(海老澤美基) [以下、Ⅱ-3]、「「耳鼻削ぎ」の中世と近世」(清水克行) [以下、Ⅱ-4]、「「邪宗門一件」に見る男女の諸相」(関 民子) [以下、Ⅱ-5]、「近世の農業労働とジェンダー」(長島淳子) [以下、Ⅱ-6]、「『誹風柳多留』のディスクール—ジェンダー・階級・身分—」(長野ひろ子) [以下、Ⅱ-7] の計7編が収録されている。

論考Ⅱ-1は、中世の物語、寺社縁起あるいは日記にみられる、男女のペアによる「夢」ときの記述を題材に、中世の男女の社会的なあり方を論述したものである。また、論考Ⅱ-2では、中世公家の公的な衣料生産(家業として天皇の衣料生産を担う山科家のケース)と私的な(「家」内の)衣料生産が取り上げられ、それぞれにおける男女のかかわり方の相違およびその変容が考察されている。

中世大和における武家の女性の戦争での働きを紹介し、戦陣に女性がいたという史料から、女性の戦闘参加の可能性を追った論考Ⅱ-3に続き、中世の刑罰における性差(ジェンダー)を扱ったのが論考Ⅱ-4である。ここでは「耳鼻削ぎ」刑を分析し、ほとんどの場合中世社会では女性に行われる刑罰であったことを論証した。そして、当初は女性を処刑することを忌む発想から発生した宥免措置であった「耳鼻削ぎ」刑が、近世に入るとその属性を失い、男女の

区別なく適応される残酷刑へと変容していくことが明らかにされている。

ついで、近世後期、大坂において発生した「邪宗門事件」の顛末を取り上げた論考Ⅱ－5では、キリシタン信徒6名の、入信条件における性差（男性：異性関係の許容、女性：異性関係の禁止）をはじめとして、逮捕、取り調べ、処刑等、さまざまな局面にのぞんでの男女のかかわり方の相違が叙述されている。また、論考Ⅱ－6は、近世農業における女性の霊力の評価、および商品経済の展開による労働の商品化の流れのなかで男女の役割分担の変遷を考察したものである。

そして、江戸時代の川柳（『誹風柳多留』、『誹風柳多留拾遺』）の語りをジェンダーの視点から分析した論考Ⅱ－7において、長野氏は語りの主体が、大半がホモソーシャルな世界のなかでの男性であったことを指摘しつつ、そこでのジェンダーと階級、身分をめぐるディスクールの特質の一端を浮き彫りにした。例えば、男女における性のダブル・スタンダードの存在、女性は性的身体として客体化され、かつ女性の身体は美醜という男性の価値基準によって序列化されること、性的身体を商品化・モノ化された女性への徹底した侮蔑的語り、等々である。

各論考を通読しての感想であるが、分析の基本概念をジェンダーに据えながら、ジェンダーという用語が文中でほとんど使用されていない論考も散見された。どちらかというところ「性差」、「男女のかかわり合い方」という表現に置き換えられている印象を受ける。執筆者たちが統一的なジェンダー概念や分析手法を共有しているかについては、疑問が残るだろう。しかし、各論考とも「男女」をセット（ペア）にして、男女それぞれの社会的なかわり方を考察し、論を展開していこうとする意図は明確に読み取れる。また、ほぼ全論考において、ジェンダーが歴史的、社会的に構築、形成された産物であること、さらにその変容の過程を論証しようと試みられていた。

概念や手法に関しては執筆者間でやや隔たりはあるものの、ジェンダー・アプローチが可能にするテーマの広汎性は、実証されたといえるのではないだろ

うか。なかでも、女性と野外の戦争とを直接関連づける史料がないなかで、戦争史にジェンダーの視点を導入することで実態を明らかにできると示唆した論考Ⅱ-3は、書かれなかった歴史事象を読み解いていこうとする斬新性が感じられ、新たな日本史像の提示を期待させるものであった。

続いて、もうひとりの編者である黒田弘子氏が執筆を担当した第Ⅲ章を紹介し、「セクシュアリティ」の視点による歴史研究の重要性について触れておきたい。セクシュアリティは、性欲、性行為、性意識といった性にかかわる現象、行動、傾向などを総称する概念とされているが、編者たちは「性に関して社会的に意味づけられた「知」であり「言説」である」(p. iv)と端的に捉えている。

黒田氏は論考「女のオンブ・男のオンブ」において、中世後期の芸能であり文学作品でもある狂言をセクシュアリティの史料として読み解き、狂言で演じられていたオンブが性的誘いをしめすしぐさであり、性的欲求の感情表現におけるジェンダー（積極的で強い男の性、性欲などない受身の女の性）は今日ほどは明確に成立していなかったことを論証した。また、オンブの前のせりふが男女まったく同一であることから、言葉による愛情表現にもジェンダーが生じていなかったと推測している。そして、現代の「われわれは、セクシュアリティの領域において、どれほど深くジェンダー（つくり出された女らしさ、男らしさ）にとらわれているのだろうか」(p. 289)と自問せざるをえないと結び、セクシュアリティもまた歴史的構築物であり、ジェンダー化されることを指摘した。

その他、第Ⅲ章には政治（人事）とセクシュアリティ（同性愛的絆）との関係を扱った論考「愛のゆくえ—伊達綱村の遺言を読む—」（氏家幹人）、維新政府がとった墮胎禁止政策を取り上げ、維新期の生殖観の形成を考察した論考「明治維新と生殖倫理—日本近代の生殖観はいかに形成されたか—」（石崎昇子）が収録されている。

以上概括すれば、本書の第Ⅱ章および第Ⅲ章は、編者たちの刊行の目的であ

るジェンダー・アプローチの有効性、可能性、そして男女の心性に深く根ざしたセクシュアリティ概念の重要性等の立証に成功しているといえよう。しかし、男性に比して、女性の——特に身体に関する——生活や経験について書かれた史料が少ない現状では、新しい分析概念や手法を導入するにもその基底となる材料に限界があるように思われる。

従来の歴史学が男性の視点からの歴史であったことに対抗して、日本において女性史が登場して20年。「女性の視点からだけでは不十分である」という反省、反論から、ジェンダーの視角から歴史を問い直す動きへ発展してきた。歴史は「男女の関係から成り立っている」という認識のもと、現在全体史の構築が模索されている。今後、その目標に向けて、女性史の手法による史料の掘り起こし、そして従来の史料との突き合わせ、重ね合わせの作業もまだまだ不可欠なのではないだろうか。

身体史研究の荻野美穂氏は、ジェンダーの視点と全体史の構築とのかかわりについて、次のように述べている。「歴史への性差の視点の導入が必要なのは、男と女が互いに排除しあうためでも、性差決定論ですべてを処理するためでもなく、魅力ある対話を通して異なる視座から眺めた歴史像を幾重にも重ね合わせていくことによって、新しい洞察を獲得し、少しでも「全体史」という見果てぬ夢に近づかんがためなのである」。(「性差の歴史学—女性史の再生のために—」『女性史の視座』、吉川弘文館、1997年、p. 173)

加えて、歴史上のあらゆる時空においてみられる、境界線上の、あるいは境界を越境する「性」の存在を、今後どのように分析、解明していくのか、課題は残るだろう。ジェンダーとセクシュアリティ等の連関性についても、編者たちの論考中に言及はあるものの、もう少し踏み込んでほしかった。それらの点では若干不満が残るが、本書は「新たな「知」」の確立へ向けて、手法の有効性、研究視座の確認という意味で有用な一冊であるといえるだろう。

なお、最後になったが、本書においてジェンダーと並ぶ主要な概念である「エスニシティ」に言及した第I章に簡単に触れて、本稿を閉じることにする。

この章には、明治時代以前のアイヌ民族のアイデンティティを取り上げた論考や、オペラの『蝶々夫人』をあえて不評であった初演演出で上演することで、より強烈に照射される「オリエンタリズム」を扱った論考等、計5編が収録され、日本史像の新たな捉え直しが試みられている。

なかでも新鮮であったのは、「日本図と他者—行基式<日本図>と「三韓」—」（黒田日出男）である。<日本>のイメージの形成、変容を抜きにして、日本の歴史を語ることはできないのではないかという問いかけは、<日本>という時空さえ永久不変のものではないことを容易に思い至らせる。ジェンダーにおいても然り、セクシュアリティにおいても然りであろう。本書は、本質論的思考に陥りがちなわれわれに、いかなる概念や事象も自明視してはならないという自明の理を、あらためて認識させてくれる一冊でもあった。

（吉川弘文館、2002年6月、340頁、本体3,200円+税）